

夕張市美術館の作品に集う

想いと語り

.....
いろいろなことを思い出した人たち

発行日：2024 年 8 月 7 日

発行：夕張市教育委員会 〈学芸員・山口〉

はじめに

二〇二三年八月に実施した旧夕張市美術館収蔵作品展二〇二三において、企画担当者による、聞き取り調査を実施しました。本冊子はその中でも、展示を見て様々なことを思い出した人たちの語りの記録を、ささやかにまとめたものです。ご協力いただいた皆様、ありがとうございます。

同じ作品を見ても、まったく違うことを私たちは感じたり考えたり、思い出したりしています。その言葉に耳を傾けることは、他者や多文化を理解することになります。また、作品がどうして今も大切にされているのか考えることができます。

作品とそこに集う言葉は、作品を照らすだけでなく、私たちが生きる場所も照らしてくれるかもしれません。それを願って、本冊子を皆様に贈ります。

目次

ふるさととはどこまでいつてもふるさと	3
まちは変化していくけれども	5
表現されていないことがある	6
家族のこと	7
自分の抛り所を確かめる	9
かつての美術館	11
風土と向き合う	13



聞き手

山口 一樹

(市教委 学芸員)

【ふるさととはどこまでいつてもふるさと】

作品には数十年前のかつての産炭地の風景や生活の様子が描かれたものが多数あります。その作品を見て「懐かしい」と話す方が多数いらっしゃいます。

同じように「ふるさと」という言葉もよく出てきます。その言葉を聞いては、「ふるさとの絵を観ることは大事なことですか？」と聞いてみました。すると八十年代のAさんは、

「ふるさとはどこまでいつてもふるさと」

なのだとか張のことを話してくださいました。どこまでいつても、という言葉の中には、それ以外には言葉にできないなにかが含まれているようでした。

Aさんはその言葉に続けて、ふるさとの忘れがたさを、画家畠山さんが自分の生活した社光という地域の風景を多く描き続けたという事実を重ねて「畠山さんね、いっぱい絵描いてるけどね、社光を描いてるものすごいあるんですよ。」と説明してくださいました。

風景を描いた画家の心にも、説明しようのない「ふるさと」への想いが潜んでいるのかもしれない。

この話に加えてAさんは、自身の父親が次のように話していたことを強く覚えていらつしやいました。

「この石畳に何人、人柱が入ってるんだろうか。」

この言葉には、山間地域で炭鉱が開山されることに伴う困難さを想像させられました。そしてそのことがあったため、自身も夕張で人のためになりたくて、

「なんとしても夕張のためと思って、帰ってきたんだよね。」

と若かりし頃夕張を離れていた時の気持ちを振り返ってくださいました。

Aさんと話をしたことで、かつてのまちの姿を表す作品は、「ふるさと」を想う人たちにとってかけがえないものだとなりました。特に、炭鉱のこれまでの困難な歴史を知っている人にとっては、「ふるさと」は多くの先人たちが眠る大切な場所だということもよくわかりました。

【まちは変化していくけれども】

長く夕張で暮らすBさんは、展覽会場であるりすたをいつも利用してくれて、若い職員に過去の夕張のことを教えてくれています。そんなBさんは作品に描かれている風景と変貌した現在の風景を比べて、

「寂しいけど、でも私方見て、ここに残ってるじゃない。それが、残ってるやつがここに絵になってるから、すごく私は感動してるよ。」

と話してくださいました。「ここ」と話した時、Bさんは頭を指差しています。

産炭地は石炭産業の斜陽化に伴い、大きく風景を変貌させていきました。そうしたまちの変化に寂しさという想いはあるけれど、絵として残っていることを喜んでくれました。

記憶として残っていることが作品としても残っているということは、例えば過去にあったものが無くなったとしても、過去を知る人を慰めたり、励ますようなことがあるのかもしれませんが。

【表現されていないことがある】

風景画などの作品からは、描かれた時の様子や状況が読み取れるものも多いです。でも作品には、表現できることに限りがあります。それを教えてくれたのは、CさんとDさんでした。

Cさんは物知りで、作品に表現されている地域について、「本庁方面が多い。」

とまちの北側の風景画が多いことを話してくださいました。Cさんは市内各地で住んだことがあるそうです。一方Dさんは、市が石炭産業に替わる産業として取り組んだ観光事業と関連させ、

「炭鉱の頃の話って出てくるけども、遊園地とアドベンチャーファミリーあった頃の話って出てこない。まあ出てこなくはないけど、僕らの子どもの頃の見えたちように炭鉱なくなっとう、衰退してって、歴史村作ってみたいなところの写真とかって、すっぱり落ちるんですよ。」

と話して、同じ地域であっても、炭鉱閉山後のことが語られていないことを話してくれました。

表現されていないこと、描かれていないものがあるからこそ、記憶の中にある風景などに、想いを馳せることができるのかもしれない。

【家族のこと】

家族のことを私たちはどのくらい知っているでしょうか？Eさんとお話した時、そのことを強く意識しました。

Eさんはある作品を見て、炭鉱の坑道内を連想し、少し怖くなったことを話してくれました。そして、家族が炭鉱労働に従事していたことも話してくださいました。

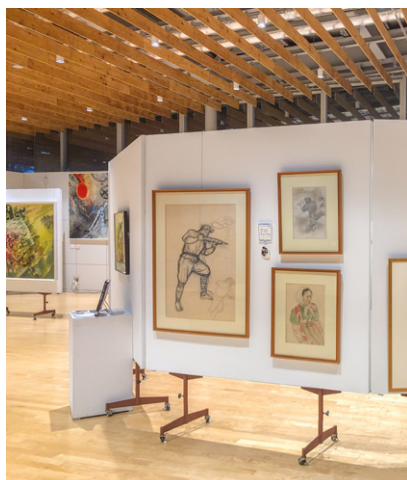
炭鉱に関連した作品を見た時には、

「あ、本当にそうだったんだな。」

と家族から聞いていた炭鉱の話の思い出されました。そして、炭鉱で働いていた家族のことを誇りに思うことを語ってくれました。

多くの家族は実際に坑内に入る機会がほとんどなく、どのような仕事だったのかを知るには、人から聞くか、写真などを観て想像することしかできません。なので、作品鑑賞は、労働の状況をイメージするのに役立つこともあるようです。

Eさんのように、炭鉱で働いていた家族のことを改めて大切に想える人が、他にも多数いらっしゃるかもしれません。



炭鉱労働の絵など

【自分の抛り所を確かめる】

「まず観たらね、顔がすつと浮かんで」と、作家の顔や姿を思い出すことを語ったのはFさん。八十代のFさんは若かりし頃、市内で活動していた作家が多数いて、彼らと行動を共にしたのだそうです。

そして思い出した作家について自分なりの考えを話してくれました。

「だから、そういう人方のね、なんちゅうんだろう、生き方みたいなのがね、共鳴したんだろうね。」

「さりげなく盗んでんだね。その人からなんか盗んでるんだね。」と話をまとめてくださいました。

Fさんにとっての鑑賞は、生き方に共鳴する過去の人々に出会うことであり、出会うことでまた、その生き方からエッセンスのようなものを得ることであるようです。

また、自身が書家であるGさんも作家との関わりが深いことから、お世話に

なつた書家のことを思い出して話してくださいました。今回の展示では書家・藤根凱風氏の作品を展示していました。

Gさんは藤根氏に書を習っていたため、藤根氏とその作品が自身にとっての「原点」となっているそうです。なので藤根氏の作品について

「僕ら教えてもらった人たちからすると、憧れるっていうか。真似できないです。すね。すごいなって今でも。」

と敬意の気持ちがあることを話してくださいました。そして自身も書家として制作する時のこととして、

「作品を作る時のベースになってるんで。同じことはできないんですけど、同じように書けないし、書いちゃダメなのかなと思ってるんですけど、心の拠り所にしながら。」

と語ってくださいました。作品を制作した人を知っている人たちは特に、作品を制作した人と作品が心の拠り所になっていて、それを確かめに鑑賞に来ることもあるようです。

【かつての美術館】

作品が人間と同じように『この世に生きて歴史を刻んでいる』ということを考えてくれたのは、よく夕張市美術館に通っていたHさんです。

Hさんが夕張市美術館の作品を観ると、学芸員だった同級生が働いていたことと、美術館が倒壊してしまった時のことを思い出すのだそうです。作品と美術館はセットで、来館者によつては、作品を観ることがかつての美術館の様子が頭に浮かぶ人もいました。

Hさんはなくなってしまった美術館を思い出し、なくなつて悲しい、という想いだけを持ったわけではありません。そのことが、りすたでの展示に期待することについてお聞きした中に滲み出ていました。

「いろんなものあつたほうがいいですよね、混沌つつかかオスみたいな。」
「やっぱり美術館ですもん。」

と、美術の展示は色々なものが展示されている方がよく、今回の展覧会は、

「冒険がないですよね。」

と過去の展示と比較して話してくれました。鋭い指摘で身が縮こまりました。

りすたと夕張市美術館とで展示されている作品が同じなのに、冒険が足りないと感じるのはおもしろいですね。夕張市美術館が実践していたかつての「冒険」を知っている、Hさんなりの励ましだと受け止めることもできました。

作品には、その作品が過去に展示されていた場所の歴史が刻まれているようです。それによって見る人によっては、当時その場所にいた記憶が思い出されるようです。



夕張市美術館

【風土と向き合う】

北海道出身で在住のIさんは鑑賞すると、

「昔のことを思い出す。さりげない絵が幼いころを思い出す、みたいな。」

と楽しそうに語り、同じく道内出身で在住のJさんは、

「冬の雪の質感が、北海道の。蘇りますよね。」

「他の美術館とか色々見るのと同じに来るのでは、なんか昔の自分の生活してた空気をすごく感じる。」

と語ってくれました。

お2人が思い出した「幼いころ」や「生活してた空気」は夕張市外で経験したことです。北海道という同じ風土だからこそ感じるものがあつたようです。

Iさんは続けて、

「勇気づけられるというか、なんかね、さりげない日常だよね。」

といって、日常の中から勇気づけられるなにかを感じ取っていました。作品を通じて、北海道の風土と改めて向き合うこともできるようです。

さいごに

本冊子では、作品を見て何かを思い出した人の語りをまとめています。思い出しながら語られる内容は、「変わることをないふるさと」や「描かれていない場所や風景」、「変わってしまった現在の風景」など、風土に関わるが多くありました。また、「炭鉱で働いていた家族」や「作品を制作した人」といったかつて関わりがあった人々を思い出した人もいました。さらに、作品が元々展示されていた「夕張市美術館」を思い出す人もいました。

思い出しながら語ることが、自身のこれまでの経験を振り返る機会になっているといえます。自身の経験を振り返ることで、私たちは教訓を見つけたり生き方を磨いていくこともできるかもしれません。

旧夕張市美術館の収蔵作品は専用の展示場所を失いました。でも、多くの人に鑑賞してもらい作品について語ってもらうと、作品にとって真に大切なことは、『人々に観てもらうこと、人々と共にあること』だとわかります。



夕張にある作品は決して目新しく
ないかもしれませんが、観るたびに
新しい何かは生まれてきます。
これからも皆様と作品を観る機会
をつくり、「私たちの宝物」として、
磨いていけたら幸いです。



みんなの思い出
すてきだね
思い出ありがとう





Finish and Begin

